

「あなたによって記される29章」

使徒 28 章 26~31、第Ⅱテモテ 4 章 1~8

鉄腕アトムは死んだ息子の代わりに造られたロボットでした。とても力が強く他の子どものようにはいかなかった為、売られてしまいました。そこで出会ったのが教授でした。教授は愛し大切にしてくれて本当の子どもの様に接してくれました。どうやって人が生きていくのかを教えてもらいました。アトムは人よりも人の心を持ち、勇敢な正義の味方になりました。近年人が人間より人間らしい AI を求めたりするようになったのは、人間が人間であることを忘れたからではないでしょうか？さて人間とは何でしょうか？パウロは人間であることを忘れて神になっていました。そんなパウロは神様が好きでした。しかし彼は神の思いを見つけることを忘れて、自分も神の様にならないといけないと思いました。サタンのおしやもそうです。人が神の様にしろとするのは怖い事です。

私達クリスチャンはイエスキリストの身丈に成長する事を願っています。しかしそれは神のようになる事ではありません。神は神の在り方を捨ててイエス・キリストの姿となって私達のところに来られました。イエス・キリストが私達に伝えたのは人間がどういふものであるかということです。「安息日を破るのか。」とイエスを冒とくしてきたパリサイ人に対し、イエスは様々なたとえを用いて話しました。「安息日に1匹の羊を見失ったら、主人は命がけて探さないだろうか。」「人の子は安息日にも主である。」と語られました。パリサイ人のように私達も大切なことを見失っていないでしょうか。

クリスチャンは日曜日正しい事を聞くので、正しくあるとします。しかし正しくあるとすればするほど正しくある事はできません。パウロは言いました。したい事は出来ず、したくない事をことさら尊んで行ってしまおうと。私達は神様にどうやったら正しくなるのかを聞きます。イエスキリストは言いました。「野の花をみてごらん、あのソロモンでさえ野の花ほど着飾ってはいなかった。」と。神様は私達の必要は全て知っておられます。「初めに神の国とその義とをまず求めなさい。そうすれば、それらのものは与えられます。」神を愛する事と隣人を愛する事という命令が、神の国とその義であることを伝えました。神様が大切にしたのは人間の心でした。

■ パウロ エルサレムからローマでの遺言

パウロは遺言を残しています。真理から耳を背け空想話にそれていく時代になります。しかしあなたがたはどんな場合にも憤み、困難に耐え、伝道者として働き自分の務めを十分に果たして下さいと言いました。自分の務めとは何ですか？

医者コラムがありました。「僕はドクターになって毎日何をやっているのか。治療を施す。そして治す。そしてまた再発し、治し、最後は死ぬ。」僕は何をやっているのだろうか。

今の時代にとって的を射すぎた言葉です。治療を受けるその人が生きていく価値がわからず。生きる意味を見失っているのだったらその人を治してあげることは非常にむなしい事です。治す側も命がけです、失敗することによって責任が問われるかもしれない、しかし治そうとします。けれど当の本人は病気になった理由を改めないのです。なので、同じ病気でやっています。世の中の人達は何のために生き、何のために存在して動いているのでしょうか、自分を大事にすることができず、自分の体にしてはならないことを喜んで行って、薬をして怠けて、...

パウロは、自分の人生を振り返りながら、人々に伝えています。自分の目的を失った人生からもう一度戻ってほしい。時が良くても悪くても寛容をつくして教えてほしい。その使命から、命を失いかけても命懸けてルカと書き綴っていったのです。私達もどんな状況になっても自分の使命をわかっているものでありたいです。ルカもギリシャ人の優秀な医者でした。その彼もローマの囚人の一人として数えられました。命懸けです。何故そんなことをしたのかというと、自分の過去をよく理解したからでした。

■ 聞いて行なうものへ！！

パウロはローマでテモテへ宛てて遺言を書きました。「彼らは聞きはするが、悟らない...」私達は、現実や、人のせいではなく、聞いて行なうものは終わりにして、聞いて行かない者でもなく、聞いて行なう者になりたいのです。使徒の 28 章では異邦人へのその恵は届けられていきます。と書かれており、それがこまできました。今日語られた御言葉を聴く時がきました。私達は神様の前に御言葉を聞くことができる自由な環境を与えられています。

先日、小学校に授業に行きました。そこで「あなたの人生を駄目にするのができるのはあなたの親や先生でも無い、友達でもない。あなたの人生を決められるのはあなただ。あなたしかない。悪い奴がいるなら、その悪い奴でも、悪魔がいるなら悪魔でもない、あなたの人生を駄目にするのはあなたしかない」と伝えました。何人もの子どもが泣いていました。その子どもたちは実際、辛い境遇にいる子どもたちです。子ども達はまだ人間を失っている子ばかりではありませんでした。私達大人の方が人間を失って、人のせいにして生きているのかもしれない。聞いて行う者にならないといけません。

■ 心から始まる行為！！信じることと愛すること

聖書は、一見、ルールを重んじているように思います。しかし聖書は人が生きる為に何をすべきかという事をずっと伝えていきます。行いから始まる行為ではなく、心から始まる行為が大切です。パウロは行いから始まる行為の中で生き続けて、神に反逆するものになっていきました。行いが先になっている人は、間違いない人を裁きます。自分もその行いを大事にできず、守ることもできません。唯一これだけはやるということを決め、優越感を得ます。人と自分が大切にしてやろうとすることは違いますが。結果、ルールが先に立つと勝ち負けができ、戦争が起こります。聖書は自分を制して忍耐しなさいと書いてあります。行為で生きてきたパウロが何故心から始められるように変えられたのでしょうか。それはイエス様に会ったからでした。会おう前のパウロは、自分の事を「生粋のユダヤ人、最高の律法学者から教えを受けて、ガマリエルの弟子で、サンヘドリンの門下生で律法には正義を尽くして、責められることが無い。」としていました。パウロがルールや正しさを振りかざしたのは、自分が間違っていることがあってはいけない、すなわち間違いを隠すためでした。恐れていた神に従う事によって、自分を守ろうとしました。そんなパウロがイエス様に会いました。パウロは知りました。イエス様はずっと一緒にいること、自分を赦して下さることを。愛されていることがわかり、パウロは信じる事、愛する事を回復することができました。

愛というのは赦すということです。自分が正しくなくていいのです。はじめから人間に正しさを無いです。こんなどうしようもなく汚い者をイエス様は赦して下さったのです。私達に赦す力はありません。赦す行為は神様のものです。私が赦されたから、赦しますという決断をするだけです。そうするとあなたのただ中にいる神があなたの心を造りかえて下さるのです。その時、神の中に私達が存在していることがわかるのです。神の中に帰るのです。

■ リーダーシップと信頼 自分の過去を土台に！

心から始める為には、本当にイエス様に会おう事です。すなわち神に帰る事です。信じることは愛する事です。行為は後から伴います。大切なのは、心です。行為ではありません。だからどんな人でも、私達はその人を信じる事ができます。神様が造った本来のその人の心は素晴らしいからです。「人はうわべを見るが、主は心を見られる。」と聖書に書いてあります。心を取り戻す唯一の方法は、愛される事です。それは愛されている事、愛されて造られていることを知るという事です。一匹狼のイメージがあるパウロですが、実は彼はたくさんの人達とのチームワークで神様の働きを成し遂げました。今自分のしたいことをしようとしていませんか。それでは失敗します。一人で動くことにはなりません。神様のために頑張っている誰かの役割を助けてください。神様が与えたその役割は、自分にも与えられた役割だからです。今一度過去をさらけ出して赦してもらいましょう。傷ついた過去があるならイエス・キリストはその時にあなたと共に傷ついていました。その傷を背負って十字架に架かりました。赦された事を信じて自分の過去を土台にして下さい。赦された本当のあなたをみつめて、過去を受け取りましょう。愛は赦すということです。信じることは愛する事です。あなたは素晴らしい神の作品です！使徒の働きはパウロ伝ではありません。使徒である私たちがどう生きるのかが書かれています。パウロはダマスコの途上でイエスに出会い変えられました。今私達もイエス様に出会わせてくださいと祈りましょう。使徒の働き 29 章はあなたの章です。

(要約者:富岡牧)

(2020年11月1日)